

---

# 逆さまの聖母

スク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逆さまの聖母

### 【Nコード】

N6392P

### 【作者名】

スク

### 【あらすじ】

もしも私に次があるのなら、私はもう迷わない。私はもう、怖がらない。目が覚めたら、私は魔王の妹として転生していた。私は命を懸けて貴方を守る。絶対にね。

## プロローグ（前書き）

遅筆ですが、宜しければお付き合い下さい。

## プロローグ

雨によって張り付いた髪を頬から剥がす事すらせず、一人の女は暗い階段を駆け上がった。

泥だらけのパンプス、ずぶ濡れのスーツに身を包んだ女は息も絶え絶えながらもその口元はどこか楽しそうに歪んでいる。

漆黒の長い髪と同色の服を纏い、更に同色の靴を履いている女は誰がどう見ても全身真っ黒だったが、整った顔立ちと真っ赤に染まったカッターシャツの襟元に、右手に持つ熱を持たない鋭利な塊が街往く人々の目を釘付けにし、人々の目を置き去りにした。

休む事無く階段を駆け上がり続けると、錆びたドアが女の前に現れた。

女は躊躇する事なくドアノブを掴むと、一気にドアを押し開けた。女の視界に飛び込んできたのは、降りしきる雨と闇を削って光り輝く街の姿。

いつも何も感じる事無くこの街で生活してきた筈だったが、何故だか女は初めてそれが美しく思えた。

それは、初めて意識して見た事によるものなのか、それとも、世を憐む思いから来るものなのかは判らない。

ただ、この光景を”あの子”にも見せたかった。

鳴り響くパトカーのサイレンを耳障りに思いながら、女は引き寄せられる様にフェンスに近寄った。

自然と下を向けば、色取り取りの傘がスクランブル交差点を右往左往し、まるで傘がダンスを踊っている様に感じて女は口元に微笑を浮かべた。

「最後の最後まで…あの子を助けられなかった。敵を討つ事すら出  
来ず、なんて無様なのかしら」

赤く染まったカッターシャツを握り締め、女は自らの手に握られた  
血塗れのナイフに視線をゆっくりと落とす。

恐怖に歪んだあの女の表情が脳裏から離れない。  
本当ならばあの瞳から光を消し去り、その魂を常闇に葬ってやりた  
かった。

だが、それも叶わぬものとなった。

「…もしも私に”次”があるなら、私はもう迷わない。私はもう、  
怖がらない」

女はフェンスに更に近寄ると、それに足を掛けた。

冷たい風が吹き、まるで女を誘うかの様に空に舞い上がる。  
そして…

「あの子が居ないこんな世界、もう要らない」

瞼を閉じ、女は迷う事なく闇に飛び込んだ。

初めまして…とは言わないよ

意識を取り戻した少女は羊水に浸っている様な安心感と共に、果てない絶望感に襲われた。

あの子の居ない世界になんて、生きていたって仕方がないのに。

身体を包み込む冷たくもなく温かくもない水はとても澄んだ色合いをしており、網膜に映った美しい七色の泡を見つめて少女は流れに身を委ねていた。

水の中に居るのに息苦しさは微塵も感じない。

まるで魚になった気分になり、足に尾鰭でも付いているのでは無いかとふざけた気持ちで見れば、そこにあったのはなんの変哲もない人の脚だった。

しかし、少女はある事に気がついた。

脚が縮んでいるのだ。

そう、自慢ではないが昔から日本人離れた脚の長さだという認識はあった。

もう一度少女は己の脚を見る。

意識がはっきりとしてきたせいか、脚は縮んでいるというよりかは子供の脚の様に細く短く、まだ成長途中の様に見てとれた。

今度は己の手を見てみる。

やはり、白く柔らかそうな手は脚同様一回り程小さくなり、こちら  
も成長途中の様に見えた。

訳も分からず全身を見てみれば、ある程度あつた筈の胸は悲しい程  
小さくなり、他の女性が羨ましがつたあの美しいくびれは寸胴鍋の  
様に変貌し、元々長かった髪は足首の位置に匹敵する程に伸びてい  
た。

何度触つても結果は変わらず、少女は言葉を失った。

凹凸のまるでない身体、それは、子供特有のもの。  
女の身体は、十数歳に満たない子供になっていた。

しかし、少女はそれ以上考えるのを止めた。  
全てどうでも良いのだ。

己が子供になるのが老人になるのが関係ない。  
これが生まれ変わりというものだとしても、また己は躊躇せず闇に  
飛び込むだろう。

無意識に強ばっていた身体から力が抜けていく。  
瞳に映り込む屈折した柔らかな青白い光が、地上がすぐそこにある  
のだと少女に告げる。

それに無意識に手を伸ばしていた事に少女は気付いたが、浮上して  
いた筈の少女の身体がゆっくりと沈み始めた。

次があれば。

あの時、そう思った己が馬鹿らしく思えた。

あの子の居ない世界で生きていける筈がない。  
消えたい、消えるのだ。

何も考えなくて良い世界へ、喜びも悲しみも存在しない、自我さえ  
も無い世界へ。

文字通り消えるのだ。

己はあの子と同じ場所には行けないだろう。

それだけが、少し悲しかった。

眼前の光が遠ざかり始め、視界に映る己の手が虚しくたゆたう。

全てを終わりにしようとして少女が瞼を閉じ掛けたその時、少女の視界が虹色の泡に支配された。

！？

それと同時に視界に飛び込んできたのは、骨張った男の手。

突然現れたそれに驚いた刹那、少女の細腕がその手に掴まれた。

泡の生まれて死に行く音が耳一杯に響き、右腕に加えられる強い力に左手を無意識に伸ばしたが少女のその行動は無駄に終わった。

重力に逆らう様に強引に引っ張られ、少女の身体は冷たい外気と柔らかな光に晒される。

世界に、少女は生まれた。

水を吸った長い漆黒の髪が重く、顎から滴り落ちる水がくすぐったいが少女の意識は掴まれた右腕を伝って己の腕を掴んでいる人物を捉える。

少女と同色の長い漆黒の髪、滑らかな皺一つ無い肌と形の良い高い鼻と薄い唇、そして、見る物全てを焼き切ってしまう様な美しい紅蓮の瞳がこちらを見つめていた。少女は息を呑んだ。

目を見開き唇が僅かに震えている事にも気が付かず、少女は視界に広がる男から目が離せない。

男は微笑を浮かべ、己が濡れる事すら厭わず少女をその腕に閉じ込



めた。

背中と後頭部に大きな掌と確かな熱を感じ、少女の心臓が一瞬高鳴る。

更に力が込められ抱きしめられるが、少女は逃げる事無くされるが  
ままだ。

さらりと男の髪が流れ落ち、少女の漆黒の髪と溶け合う様に重なった。

少女は消えたいと願った。

しかし、男の紅蓮の瞳に映る退行した己の泣き顔と男の瞳を見た瞬間、少女の思いは劇的な変化を遂げる。

「…我が愛しの妹よ。我と共に永久とこしえの時を生きてくれ」

男の願いに、少女の大きな瞳から大粒の涙が零れた。

## 色を取り戻した世界（前書き）

今年最後の更新です。皆様、良いお年を！

## 色を取り戻した世界

僕の願いをきいてくれるなら、貴方がずっと欲しがってきたものを貴方にあげるよ。

それにしても、神様もだけど、やっぱり僕って酷い奴だと思わない？ ああ、こんな事を言っても解らないか。

まあいいや、そのまま話を聞いててよ。

後から話すからさ。

何時の時代もあの人にとっても酷い事を強いる僕は、本当に鬼畜生だと思っただよね。

この悲しい追いかけてつこを変えたくて貴方をお願いをしたのに、やっぱり会いたいつて強く思ってしまう。

未練たらしいつたらありゃしない。

結局何一つ変わってないし、変わらないのかもしれない。

でも、独りぼつちの泣き声をもう聞きたくないんだ。

だから、僕は逆らってやる事にした。

この追いかけてつこを、最後にする為に …。

長い睫毛に縁取られた瞼が刹那に震えた。  
それと同時に男の眼前にある小さな泉の中心から、ゆっくりと波紋  
が広がり始める。

「っ…魔王様！」

「わかつている」

今まで記憶の片隅に追いやられていた小さな泉の異変に、慌てふた  
めく声が響く。

「エンテ、皆を下がらせておけ」

「御意…」

エンテと呼ばれた金髪碧眼の見目麗しい男は、眉根を寄せながら返  
事を返すと霧の様に姿を消した。

男、基、魔王は段々と波紋が大きくなってゆく泉に一步近付く。

周囲に聳える大木が高調子気味のを立てて軋み始めた。

容赦なく肌を刺す強力な魔力をその身を持って知った生き物達は、  
絶対的な存在が与える恐怖を本能的に感じ取ったのであろう。

竦む足をなんとか叱咤し、魔王と一部を残して他の生き物達はその  
場から脱兎の如く姿を消した。

それが生き物にとって極当たり前の行動なのだと理解している。

だがしかし、魔王が持つ役割とそれによって、この世界に生まれ落ちてからと言うもの魔王はずっと孤独だった。

周囲に誰も居なかった訳ではないが、本当の意味で一緒に居た事等只の一度も無かった。

しかし、今己の目の前に生まれようとしている存在がある。魔王は己の胸に手を当てた。

「……………」

もう熱は感じなかった。

あの者が口にした通り、本当に消えて無くなってしまったのだろうか。

願いを聞き入れた時のあの者の表情を思い出し、魔王は瞳を伏せた。

「大切なものを他人に任せなければならぬ思いとは、一体どれ程の苦しみを伴うのだろうか…」

今まで大切な者を持った事が無い今の己には到底理解出来ないだろう。

だが、己はあの者の言う事を信じた訳ではなかった。

今まで一度も会った事のない赤の他人の言葉を信じるには長く生き過ぎ、これからもそう有り続けなければならぬ程に己には自由が

ない。

人間達は己の役割を理解出来ない、否、例え言ったとしても理解しようと思わず、信じる所か鼻で嘲笑った挙げ句罵倒されるだろう。

それ程までに魔族と人間との間には埋める事の出来ない大きな溝があった。

人間達は優れた身体能力と魔力を持つ魔族に対して遙か昔から劣等感を抱いて来た。

それに伴い比較的大人しくしてきた人間達は、魔族との大きな小競り合いも特に無く、つい最近まで穏やかに生きてきた。

しかし、数百年前から魔王の魔力が不安定になり始め、外に溢れ出ようとする魔力を抑え込む為に魔王は居城から出なくなった。

魔に属する者達もそれに合わせる様に大人しくなる。  
それが、人間達に変化を齎した。

「面倒な…」

魔王の素直な思いだった。

本音を言つと、魔王はこの世界がどうなつたつて構わなかった。

誰かが己の首を刎ねない限り死ぬことが出来ない不老不死の身体を持つ魔王にとって、この世界はただの牢獄の様に見えた。

一度本気でこの無聊なる世界を滅ぼしてやろうかと考えたが、魔王が持つ役割のせいなのか、はたまた見知らぬ誰かの意思が働いているのか、どんなに望んでも力が言うことを聞かずそれは失敗に終わった。

なんの変化も期待出来ない怠惰な生活、世界の為に生き、己の為に生きる事すら許されないそんな毎日。

それが永久に続くのかと思うとまるで足下が崩れ落ちて行く様な絶

望感に苛まれ、柄にも無く恐怖した覚えがある。

いつそ自ら命を絶とうかと考えたが、それも何故か叶わない。

己は己を殺せない。

己以外の誰かの手でないと、この牢獄から抜け出せないのだ。

魔王は全てを諦めた。

魔を統べる存在なだけに、魔王より力ある者はこの世に存在しない。唯一対抗出来るとすれば、人間達が異世界から召還する”退魔の神子”と、それと同時に現れるとされる勇者のみである。

魔族が大人しくなつてすぐ、”退魔の神子”が召還されたと報告があがった。

それに伴い、勇者が現れたという報告も……。

魔王はその報告を聞いた時、この牢獄から解放されるかもしれないと言つ考えがすぐさま浮かんだ。

それ程までにこの世界に嫌気がさしていたのかと、苦笑したのも覚えてる。

「……………」

辺りに漂う魔力が増加した事により、魔王は意識を泉に戻した。

その時、

ふわり

視界に入ったのは、透明な泉の水面にたゆたう長い黒髪。

そして、その先に僅かながら白い指先が見えた。

その時、魔王の胸は大きく高鳴った。  
危険なものなら、あの者の願い等忘れて即命を絶つてやろうと思っ  
ていた。

しかし、魔王の胸に去来したこの狂おしい程の何かが魔王を支配し、  
鋭い筈の思考を鈍らせる。

それはあの者による影響なのか、それとも己の純粋な思いから来る  
のかは解らない。

胸の辺りから今まで感じた事の無い強烈な思いが溢れ出し、頭のと  
つぺんから足の指先までもが目の前の存在を渴望する。

すると、何故か急激に泉から魔力が弱り始めた。

長い漆黒の髪が、白い指が心なしか遠ざかり始める。

「!?!」

どんな時でも冷静だった筈の魔王は、生まれて初めて焦りという物  
を知った。

絶対口にはせず、始めから無理なものとして諦めていた永久に寄り  
添える存在。

それが、消えてしまう。

焦る気持は、恐怖というものに切り替わった。

己の掌を魔王は見る。

長く伸ばされた爪と、大きな白い手。

迷いは無かった。

触れられる。



何故か確信があった。

魔王はそのまま泉に手を突っ込むと、濡れる事も厭わず片膝をついた。

白い指先を通り過ぎ、細い腕を捉える。

「っ!!」

魔王の心は歓喜に打ち震えた。

触れられた。

触れられたのだ!

塵になる事も、消えてしまふ事もなくしっかりと存在を感じる事が出来る。

なんと尊い存在、なんと稀な存在、なんと愛しき存在…。

この思いを、どうしたらいい。

口にする程豊かな経験を積んでおらず、また言葉では語り尽くせぬこの思い。

白い指先が空気に触れ、目の前の存在は世界に生まれた。

つまらない色褪せた世界は、魔王の網膜に再び色を取り戻した。

鼓膜を打つ水の音。

目の前に生まれた少女のなんと愛らしいことが。

驚きに見開かれた漆黒の双眸と、可愛らしい桜唇。

双眸と同色の水に濡れた髪は光り輝き、顎を滴る水滴が少女ながらもなんと艶めかしい。

魔王は、迷う事無く少女を腕に閉じ込めた。

少女の息遣いをしっかりと感じ、更にその存在を確かめようと抱き締める力を強める。

ああ、神という存在がいるのならば、初めて感謝したいものだ。

そう思い、魔王の心は生まれて初めて満たされ始めた。

絶対に、絶対に離すものか。

この少女は一縷の光。

この光を無くす様な事があれば、今度こそ魔王は世界に絶望するだろう。

もしも、もしもそんな絶望的な日が来る様な事があれば、如何なる手段をもってしても世界を壊してやるのだ。

己に出来ないのであれば、己の手足となつて動く存在達に命じれば良い。

ゆっくり、ゆっくりと愛して行こう。

何重もの真綿にくるみ、大切に育てるのだ。

いつか、己の唯一の花嫁となれる様に……。

今更ながら、あの者の言った言葉を魔王は信じた。

そうでなかったとしても、なんとかする自信はある。

あの者のひくつく顔が脳裏に浮かび、魔王はほくそ笑んだ。

あの者は特に指定してこなかった。

だから、こういう形で願いを遂行した所でなんの問題もない筈だ。

だがまずは、腕の中の存在に嫌われてはいけない。

早急に事を進めて嫌われようなら、魔王は最早生きては行けないだろう。

「…我が愛しの妹よ。我と共に永久とこしえの時を生きてくれ」

まずは妹として我が元へ迎え入れる…。  
こうして、魔王の世界が始まった。

## 第二の生、私はもう迷わない（前書き）

皆様、明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い致します！

## 第二の生、私はもう迷わない

「クドミ様！お待ち下さい！」

姿が反射する程に磨かれた乳白色の廊下を、床とは対照的な黒い服に身を包んだ少女がゆったりとした歩調で歩いていた。

緩く結われた髪に大輪の赤薔薇のコサージュを付け、上質な布地で作られたゴシック調の漆黒のドレスは裾や袖、首元にたつぷりとリースやフリルがあしらわれとても機能的だとは言いが、露出の少ない少女の白い肌を際立たせ、花の顔かんはせを持つ少女の美しさと儚さを他に知らしめる。

名前を呼ばれて振り向けば、少女、クドミの漆黒の双眸が二人の女性の姿を捉えた。

「イルイアンナにデインヌ…？そんなに息を切らしてどうしたの」

クドミは見た目に反して落ち着いた雰囲気と口調で目の前に居る自分付きの侍女達の名を呼んだ。

右手に居るのは群青色の長いおさげをこしらえた小柄な可愛らしい女性、イルイアンナ。

そして左手に居るのは中性的な顔立ちに真っ赤な短めの髪と冷たい

印象を醸し出し、左目の辺りを白い包帯で覆った隻眼の長身女性、  
デイン又だ。

二人は、正確に言えばイルイアンナは顔を若干赤らめながら何か怒っている様子で、それと対照的にデイン又の表情は変わる事無く無表情のままだ。

「どうしたの…ではありませんわ！今クドミ様は城の外へ出ようとしていたのではありませんか！？外へ向かう時は、供を必ず付けて下さいと言った筈です！」

イルイアンナのあまりの剣幕に押され、クドミは無意識のうちに口を引くつかせて後ずさった。

それを好機と言わんばかりにイルイアンナは畳み掛ける。

己より少し高いだけの筈のイルイアンナが何十倍にも大きくみえるのは何故だろう。

腰に両手を当てて上から見下ろされ、クドミは冷や汗をかいた。

「わっ！」

イルイアンナにじりじり押されていた刹那、突然身体を持ち上げられる感覚と共にクドミの低かった視界が高くなった。

今度はクドミがイルイアンナを見下ろす形となり、クドミは己が誰かに抱き込まれていると理解し、己を抱く人物を見ようと首を捻る。

「デイン又！邪魔をしないで！」

ツンと仄かに香る独特のアルコールの香り、首を捻ったクドミの視界一杯に映ったのは白い包帯。

無表情面のデインヌの端正な顔がそこにあった。

デインヌに抱かれたままクドミはイルイアンナに視線を戻す。

「邪魔をするつもりは無い。しかし、クドミ様を苛めるのは許さない……」

少し低い、耳に心地良く響くデインヌの声音。

鼓膜を震わすデインヌの声音は中性的な顔に良く合うハスキーボイスで、デインヌの首筋に顔を埋める形で抱かれているクドミの鼓膜に直接響く。

女性でありながらまるで男性に抱かれている様な感覚に襲われ、クドミの頬は無意識に高潮した。

「普段滅多に話さない貴方が、クドミ様の事になると突然饒舌になるのね……。でもね、いい事！？私わたくしだってクドミ様が嫌いだからこんな事言っんじゃないわ！寧ろその逆です！大切、大好きだからこんなに口煩くなるのですわ！！」

イルイアンナの言葉を聞いて、クドミは急に申し訳ない気持ちになった。

イルイアンナを怒らせたのは、紛れもなく己の浅はかな行動のせいだ。

それに、もしも己に何かあれば責を問われるのは間違いなく身近にいるイルイアンナとデイン又だろう。

クドミの侍女を外され、解雇されるだけならまだマシだ。

しかし、きつとそれだけでは済まされない。

そう断言出来る程の確信がクドミの中にあつた。

「…ごめんなさいイルイアンナ。もう二度と一人で出歩かないわ。天気が良かったから少し風に当たりたくて…貴方達を困らせるつもりは毛頭無かつたの」

しょんぼりとした表情と声音で詫びたクドミを前に、我を取り戻したイルイアンナは両手を己の真つ青になつた頬に当て、ずしやりと両膝について絶叫した。

「わ、わっ私つたらなんて事をおおおおーっ！！我が主であるクドミ様を説教するなど、私は一体いつからそんなに偉くなつたと言うの！？私はたかが一介の侍女…魔王様の…魔王様の妹君になんて無礼を働いたのでしょう！もう死刑しかないわ！魔王様！この愚鈍なる私の首を撥ね、死刑に処して下さいませ！！！」

床に額を擦り付け、否、額を床に打ち付け始めたイルイアンナにまたかと思いつつ、クドミはデイン又の腕から飛び降りた。

「い、イルイアンナ?! もういいから! そんなに続けるとイルイアンナの額が割れちゃうから!」



謝り続けるイルイアンナの肩に手を当て動きを止めると、イルイアンナの瞳がこちらを見た。

イルイアンナの瞳から大量に流れ出た涙と、既に割れていた額から流れ落ちる血液をクドミは己の袖を使って拭ってやる。

すると、イルイアンナの美しい肌が付いていた痛々しい傷跡が綺麗さっぱりと消えていた。

イルイアンナは暫くしゃくりあげた後、皺の寄った黒いスカートを叩きながらよろりと立ち上がる。

「く、クドミ様…なんてお優しいの！……取り乱してしまい申し訳ありません。クドミ様の侍女失格ですわ。イルイアンナ、一生の不覚！」

落ち着きを取り戻したイルイアンナを見て、クドミは安堵の溜め息をついた。

普段のイルイアンナはしっかり者の常識ある人物に見えるが、一旦ネガティブモードに突入すれば地獄の底まで止まる事無く転がり落ちて行くだろう。

イルイアンナの口癖である”一生の不覚”も、何度耳にしたか解らない。

初めて会った時から今までの間で何度か経験したせいか、イルイアンナの行動とあしらい方に慣れてしまった己が居た。

「慣れとは怖いものね……」

クドミはぼつりと呟き、天井を仰ぎ見た。

そう、慣れとは怖いものである。

クドミは今己が置かれている状況になんの違和感も感じなくなりつつあった。

否、本当の理由は己の魂がこの世界を受け入れたといった方が正しいのかもしれない。

この世界、ストルムフィストにやってきたクドミの最初の記憶は水にたゆたっていた所から始まる。

そして、忘れもしない強烈な力を秘めた何処か懐かしくも悲しい紅蓮の瞳を持つあの人。

出会った月日はとても短い。

しかし、今のクドミには誰よりも大切で、誰よりも愛しい存在となった。

無条件で己を愛してくれる存在、このストルムフィストの闇を統べる存在。

人は彼を、魔王と呼んだ。

そして、己はその魔王の妹としてこのストルムフィストに第二の生を受けた。

何故転生以前の記憶が残っているのか解らない。

そのお陰で、この状況、世界を受け入れるのにとっても時間が掛かったのは記憶に新しい。

日本に、クドミの魂が昔存在した地球に”魔法”は存在しない。

空飛ぶ島もなければ、歪な形をした凶暴な魔物も勿論存在しない。

初めて己の置かれた状況を理解したのは、初めて魔法を目にした時だ。

己の掌から炎の塊が現れた時のクドミの表情は、周囲が言うにとても傑作だったらしい。

そうして未知なる経験を重ね、周囲に助けられながらクドミは漸くこの世界と己の置かれた状況を受け入れる事が出来た。

「所で、貴方達私に何か用があつたんじゃないの？」

現実に意識を戻したクドミは、イルイアンナとディンヌを見る。

イルイアンナは思い出しましたと言わんばかりに目を見開き、口元に手を当てて大きく叫んだ。

「わ、忘れていましたわ！！宰相のキエフ様がクドミ様をお呼びです！」

「キエフが？分かった。今から行くわ」

クドミは意識を集中し、目的の人物の魔力を探す。

広い城の中に居る何百何千もの力を感じるが、目的の人物の魔力は強大で探す事等容易い。

次の瞬間には、クドミの小さな姿はその場から掻き消えた。

それを追う様に、イルイアンナとディンヌの姿も消えて無くなっていた。



？

「呼んだ？キエフ」

声が聞こえるよるも先に濃密な魔力を感じ取り、魔王の右腕であり宰相でもあるキエフ「イリゴスはモノクルに指を当てながら静かに振り向いた。

振り向いたキエフの視界には、小首を傾げながら空中に浮いている愛らしい少女の姿が映る。

「ああ、クド…来てくれたんですね」

視界にクドミを捉えた瞬間、キエフは目尻を下げながら微笑んだ。

その笑顔が持つ破壊力は凄まじく、見る者を虜にする確率はほぼ百パーセントに近いと言っても過言ではない。

元々彼が持つ魅了の力は、格下の魔物や魔族、人間達には力を抑えていても効果を発揮する。

もしも彼の箍が外れ魅了の力が滲出すれば、心を奪われた廃人があつと言つ間に何千何万と出来上がるだろう。

そして、蕩ける様な笑顔でこちらを見つめる金糸の髪と蒼い瞳を持

つ天使の容貌をした美麗なるキエフは、悲しい事にその容貌を裏切る心根の持ち主だった。

彼が本物の天使ならば、心を奪われ廃人となった者達にさえもその広く深い懐に招き入れ慈しむだろう。

しかし、残念ながら彼は天使でもなければ悪魔でもない。

狭く浅い懐と、他人の命等毛ほども気にしない悪魔の心を持ったただの魔族なのだ。

勿体無さ過ぎる、クドミがそう思いながらキエフに人知れず溜め息をついていると、美しいキエフの柳眉がひくりと引き吊る光景が視界に入る。

そして、突然の悲劇がクドミを襲った。

「あれあれあれ〜？流石の”無慈悲な麗人”も、クドちゃんの前だとデレデレになっちゃうんだねえ!？」

「ぐっ!？」

第三者の声が耳を掠めた瞬間、何者かがクドミの身体を背後から抱き込んだ。

”あの”クドミにこんな事をしてくる命知らずな者は、今の所一人しか居ない。

「め、メルツ…！メルキオルク〜…！苦しい！じ、絞まっている絞まっている！」

手加減無しなのでは…と思う程の強い力で抱き締められ、ふわりと漂う己の侍女と同じ香りがクドミの鼻腔を刺激する。

ここまで強く抱き締められてはいないが、全く同じ動作をする二人をやはり夫婦なのだとクドミは悲しいかな再認識した。

「メルキオルクツ…！その汚い手を今すぐ放しなさい！クドが汚れるでしょう！」

蒼い双眸をきつく細め、クドミの自由を奪う細腕を掴もうとキエフは手を伸ばす。

しかし、クドミを抱いたまま、軍医メルキオルク「ダナシスはひらりと後退した。

口元に弧を描いたメルキオルクの白糸の髪が宙を舞い、紫色の双眸が愉快そうに細められているのを目にしたキエフは不機嫌そうにぎりりと歯を食いしばる。

クドミを抱き締めたままクドミの頭を己の頬を使ってぐりぐりと愛撫してやると、キエフの周囲の温度が面白い程に急降下して行くのを感じ取り、白衣姿のメルキオルクは更に笑みを深くした。

「ぎゃああああ〜っ！！私のクドミ様が押し花の様に可憐に麗しく、そして気高く潰されているわ！」

私は一体どんな風に貴方の目に映っていると言っの…。

押し潰されている事に可憐もくそも無いのだが、いつの間にか現れ

たイルイアンナの中でクドミはやたら美化されているせいか、クドミの行動一つ一つが美しく見えるらしい。

イルイアンナはぎゃあぎゃあ叫びながらメルキオルクの腕を掴むと、そのまま力任せにメルキオルクを吹き飛ばした。

重力に逆らう事無く壁に吸い込まれて行くメルキオルクの前にイルイアンナは転移すると、スカートから惜しみ無く食み出る白い脚を天に昇る程高く掲げ、メルキオルクの顎下を容赦無く捉える。

血飛沫を吐いたメルキオルクの腕から素早くクドミを奪い取ると、まるで悪漢からヒロインを助けたヒーローの如くひらりと着地し、それと同時に凄まじい音と埃を立ててメルキオルクは壁にめり込んだ。

「お怪我はございませんか、クドミ様!?」

「…私は大丈夫。だけど、メルの安否が気になるわね」

ふうとため息を付いて床に足をつけると、瓦礫の中から白衣を真紅に染めたぼろぼろのメルキオルクが高笑いしながら立ち上がる。

それを確認したキエフとイルイアンナから聞こえてきた舌打ちは、きつと空耳だったに違いない。

否、そう思いたい。

「うふふへふつ…！イルイアンナ、君の蹴りは相変わらず素晴らし  
いね！今まで何度僕の顎を粉碎したのか分からないよ。君の蹴りは、  
闘神と名高いかのサテュライリスにも匹敵するんじゃないかい？あ  
あでも、そのお陰で嫁の貰い手がないんだっけ？残念だねえ…。ざ



「まあ見るだけどね！！」

褒めている様で確実にイルイアンナを貶す言葉を吐き、メルキオルクは拍手しながらゆっくりと歩き出す。

「…キエフ様、奴を殺しても良ろしいでしょうか。あんなマッドサイエンティストの一人くらい居なくなっても困りませんわ」

いつもキラキラと光を宿していたイルイアンナの美しい瞳が恐ろしい程に据わっていた。

「良いでしょう。許可します」

愉快そうに笑うキエフを見て、クドミは焦った。

本当にこの二人は遣りかねない。

二人はメルキオルクに特に容赦が無いのだ。

「だ、駄目よ！？駄目駄目！いくら鬱陶しくて生きている価値が無くても、メルはデインヌの旦那様なの。デインヌが可哀想だからそれは絶対に許可出来ないわ」

「ううん。クド、君は無意識にいつも酷いよねえ？僕の繊細な心が粉々になっちゃいそう」

実は、クドミもメルキオルクに容赦が無かったが、本人は無意識らしい。  
泣き真似をしながらいつの間にか傍らに立っていたディンヌを抱き締め、メルキオルクはディンヌの控え目な胸に顔を埋めた。  
ディンヌは無表情のままメルキオルクの頭を撫で、まるで子供をあやす母親の様だ。

「ディンヌ、貴方メルキオルク様を甘やかし過ぎよ。夫の手綱は妻が握っていなければ」

「……………」

イルイアンナは腰に手を当て苛立たしげにディンヌに説いたが、ディンヌからはなんの反応もなく、頭を撫でる手は止まらない。  
優越感に満たされざまあみるとメルキオルクは極彩色の笑みを浮かべるが、それはなんとも儂く消え去る事となる。

「うふふっ…何を言っても無駄だよお？ディンヌは僕の味方だから…」

「大切なクドミ様が汚れるわよ」

「躑を開始します」

この間、僅か0・5秒。

「あれえく？ディンヌ、その手に持っているのは何かなあ？？」

ディンヌの手にいつの間にか握られていた手綱から奇声を上げて逃げ回るメルキオルクを目にしながら、クドミは何度目かの溜め息をついたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6392p/>

---

逆さまの聖母

2011年5月4日13時50分発行